

## もの言う牧師のエッセー 第231話

## 「ジョーの明日」

当時、日本最短記録の8戦目で世界王座を獲得、その後も3度の戴冠を果たし、一時は網膜剥離により引退を勧告されたものの劇的 KO で復活を成し遂げ、今なお現役ボクサーとして生き続ける辰吉丈一郎。原則的に37歳とされる日本人ボクサーの定年をすぎて45歳になった“浪速のジョー”の日常を20年にわたり追いかけたドキュメンタリー映画「ジョーの明日」が公開された。彼はなぜ辞めないのか？

「僕にとっては、ボクシングが生活の一部なんです。」と答えた彼。「みんなも朝起きると歯を磨くでしょ？それがボクサーだから“走る”が生活の一部で毎日走る。階級ごとに体重制限があって太ってはダメだから、一日1食を続けてるのもそう。朝起きて走って、掃除して、買い物して、夜練習して、帰って、洗濯して、飯作って、風呂入って寝る。極端に言えば、それを365日繰り返すのが日常というか。正直、試合が組めない今の状況はきついんです。でも、何かを引っ繰り返すためにやっているんだから、練習は一日たりとも休めない」。試合がないから全く無収入で、3度チャンピオンになった時のファイトマネーを切り崩し生活しているという彼だが、過去には数千万単位のCM出演を断ったとの“伝説”もある。「だって僕、タレントじゃなくてボクサーなんで。ボクサーがCMって違うと思うんで。小銭ならいいですよ。でも何千万というお金を稼いではダメだと思った」。後悔は一切ないと言い切る。引退を条件にWBC（世界ボクシング評議会）は、彼の殿堂入りを確約し、4つ目のベルトまでくれるという話もあったが、「丁重にお断りしました。だって、ベルトって恵んでもらうもんじゃないでしょう？ボクサーにとってのベルトは、自分で戦って勝って獲るものでしょ？」いやはや何とも痛快である。

**「ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。空を打つような拳闘もしていません。私は自分のからだを打ちたたいて従わせます。それは、私がほかの人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者になるようなことのないためです。」**

### 第一コリント人への手紙9章26-27節、

と聖書に記されている、かつて“やんちゃ”していたガイエスの弟子となり、壮絶な人生を送ったパウロの言葉を思い出す。彼が宣教した約2000年前のローマではグラディエーター（剣闘士）が盛んで、彼は己の信仰の戦いをそれに重ね合わせたのだろう。キリストを信じて救われた者には、無条件に信仰の戦士のチャンピオンとしての資格が与えられる。いっぽうでそれは、試合に出てベ

ルトを目指し続ける人生でもある。そのために地道に祈り、聖書に親しみ、教会に通い、善に親しむ毎日が続く。金のない時もある。何も起こらず苛立ちがつのる時も。しかし、真の信仰者は、何かをひっくり返すの信じ、今日もキリストと共に走り続ける。

2016-4-22

